

【活動報告】

巡回パネル展

「東京 150 年 ～公文書と絵図が語る首都東京の歴史～」

東京都公文書館 史料編さん担当

西木 浩一

はじめに

平成 30 年（2018）が江戸から東京への改称、東京府開設から 150 年の節目であることを記念し、東京都は「Old meets New 東京 150 年」事業を実施してきた。東京都公文書館はその一環として「東京 150 年—公文書と絵図が語る首都東京の歴史」というテーマで展示パネルを作成し、4つの会場で巡回展を開催した。本稿はその事業概要を報告するものである。

I 展示パネルの構成

東京府の開設から 150 年という節目に当たる本年は、当館にとっても開館 50 年という記念すべき年であった。当初は、これに関連した企画も計画したが、 $150 - 50 = 100$ 、つまり東京府が開設されて東京府文書の作成・管理が開始されてから 100 年にわたる前史を、1 世紀に及ぶ当館所蔵資料の蓄積・形成期ととらえて、一体として展示していくこととし、標記のテーマを以下のように構成した。概要とパネルタイトルを紹介していこう。

1 江戸から東京へ

天下の城下町江戸から、近代国家日本の首都東京へ。明治初年、近代へ移行する激動の時代、都市東京がどのように生まれ変わっていったのかを探るコーナーである。庶民生活の変化にも目を配りながら、近代移行期の東京のすがたを追っていった。

東京府開庁／東京奠都／首都中核機能の形成／汽笛一声—鉄道の開通／銀座煉瓦街の誕生／東京開市と居留地の設置／築地ホテル館／明治初期の迎賓館—延遠館の誕生／開化の世相と庶民生活—違式誹違条例の制定／開化 vs 旧弊 興廃くらべ／日本髪から洋髪へ

2 東京に尽くした人々の足跡

幕末維新期の激動を乗り越え、首都としての機能整備を進展させていった東京。そこには政治・経済のみならず学校や文化施設も集中し、ランドマークとなる首都を象徴する建造物も建てられていった。しかしまたこの都市は、火災や大震災、さらには戦災による壊滅的な被害を繰り返し経験し、その都度奇跡的な復興を遂げてきた。

このコーナーでは東京の発展に尽くした数多くの人々の中から多様な分野で活躍した 11 名を選び、当館所蔵資料の中から興味深いエピソードとともにその足跡をたどっていく。

勝海舟—江戸を火の海とするなかれ／西郷隆盛—銅像誕生秘話／福沢諭吉—海賊出版を糾弾する／渋沢栄一—近代日本実業界の父／津田梅子—「女子英学塾」の設立／下田歌子—

女子教育の先駆者として／ジョサイア・コンドルー日本近代建築の父／辰野金吾ー東京駅を設計する／尾崎行雄ーインフラ整備と日米友好ワシントンの桜／後藤新平ー東京市の自治と関東大震災後の帝都復興／安井誠一郎ー戦後復興からオリンピック招致へ

3 東京都公文書館 ～ 50年のあゆみと100年の前史

昭和43年（1968）10月1日、東京都港区海岸一丁目に誕生した東京都公文書館。その前身は昭和27年に設置され、東京府・東京市行政文書や江戸明治期史料の保存と目録作成、史料編さん事業に取り組んでいた都政史料館という組織だった。この館は、戦時中に文書疎開して難を免れた資料群が文書課四谷書庫に集められ、そこに戦前から東京市史編さんに従事していたスタッフが文書整理の任に当たることとなったところから成立していったもので、戦時中・戦後の緊急体制が生んだ副産物であった。

ここでは、東京府成立以来の100年の前史にどのように資料が形成され、保存されてきたかをたどり、あわせて公文書館設置から50年のあゆみを紹介する。

東京府・東京市の文書管理／東京府・東京市の編さん事業／文書疎開から都政史料館へ／東京都公文書館の50年／公文書館の新たなステージに向けて

4 東京都域のなりたち

今から150年前に誕生した東京府を出発点に、その後移管・編入によって管轄区域を拡大しつつ、内部の行政区画もめまぐるしく変わっていった。その複雑な変遷を探っていくには現在の東京都を4つの地域に分けて考えてみるのが有効である（右図参照）。

このコーナーでは、この図を手がかりにしつつ現在の東京都域と行政区画ができあがってくる過程をたどっていく。

東京府の成立と廃藩置県に伴う拡張／15区と6郡の成立／東京市の成立と明治の町村合併／伊豆諸島と小笠原諸島の編入／三多摩の編入／郊外の都市化ー大東京35区の成立／民主主義の礎ー東京23区の成立



- A : 江戸時代の町奉行支配地。明治11年（1878）に15区が成立
 B : 江戸周辺の農村地帯。20世紀に入って都市化が進む新市街地
 C : 伊豆諸島及び小笠原諸島からなる東京の島しょ地域
 D : 神奈川県から明治26年（1893）に編入された三多摩地域

II 巡回展の取り組み

Iで紹介した展示パネルを基本として、東京150年事業の一環として以下の4会場で巡回パネル展を開催した。それぞれの会場の特性に応じて付加的に内容の充実を図ったので、そのポイントとともに紹介していきたい。

1 都庁第一本庁舎アートワーク台座（本期間中は仮設）

平成30年9月5日（水）から9月9日（日）まで

都庁第1本庁舎エントランスコーナーに設置された展示場所、アートワーク台座を使用している展示であるが、あいにく庁舎工事のため仮設スペースを利用した。また、他の出展者と

併用したため、ごく一部のパネルを展示するにとどまった。しかし、庁内に対する公文書館のPR場所としては得がたい機会ととらえ出展したものである。

2 都立多摩図書館（国分寺市泉町）

平成30年9月10日（月）から10月18日（木）まで

平成31年度末に移転が予定されている新しい公文書館に隣接する都立多摩図書館の展示コーナーを利用したもので、今後の連携事業を先取りするものとなった。



都立多摩図書館展示風景
関連書籍を手にとって閲覧できるコーナーは好評だった。

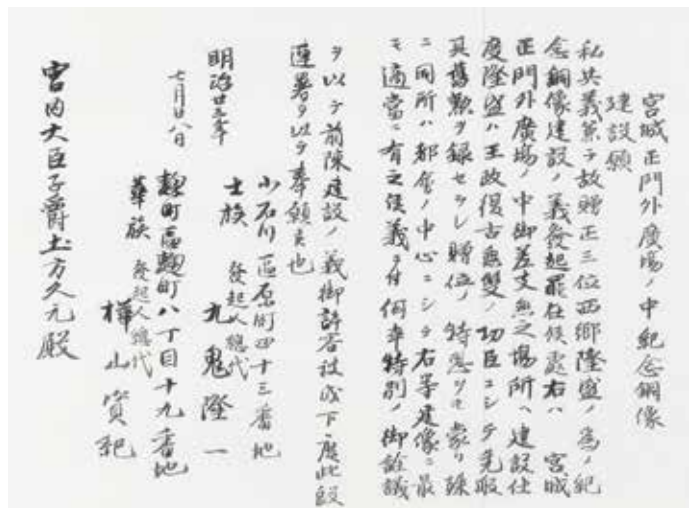
都立多摩図書館は、雑誌の特性を活かしたサービスを行う「東京マガジンバンク」と、都内の子供の読書活動を推進する「児童・青少年資料サービス」の2つの機能を柱とする館である。今回、子どもに配慮した展示は準備できなかったが、展示に関連する雑誌や図書を備えて、その場で手にとっていただくコーナーを設置し、たえず多くの観覧者が利用されていた。図書館・公文書館の連携の在り方を考える上でも貴重な経験の場となった。また期間中、2回にわたってギャラリートークを実施した。

3 東京都公文書館2階展示コーナー

平成30年10月23日（火）から11月20日（火）まで

ホームグラウンドでの開催は、東京文化財ウィーク2018参加企画展と位置づけ、国の重要文化財に指定されている「東京府・東京市行政文書」の中から関連する原史料を展示した。

また、この企画展に合わせて作成した図録を配付した他、第IVコーナー「東京都域のなりたち」の内容を約9分の映像と解説にまとめたDVDの視聴コーナーを設けた。さらに関連する動画として「延遼館～明治ニッポンおもてなし事始め」「復興のアルバム」もご視聴いただいた。



西郷隆盛コーナーでは、西南戦争最大の激戦田原坂の戦いのようすを生々しく伝える当時の電報（左）や、西郷の名誉回復後に樺山実紀らを発起人として出された西郷の銅像建設願などを原本で展示した。ちなみに当初出願された建設地は宮城正門外、つまり宮城前広場であり、その後軍服姿という出願もなされた。

4 東京区政会館エントランスホール（千代田区飯田橋）

平成30年11月26日（月）から12月21日（金）まで

最後の巡回先となった東京区政会館では、共催した公益財団法人特別区協議会作成による巨大な壁面パネルや、床面シート等に加え、いっそう充実したパネル展示構成となった。

ここでも「東京都域のなりたち」「復興のアルバム」の2タイトルを視聴するコーナーを設けた。

また展示期間中、同会館3階にある首都大学東京オープンユニバーシティの特別講座として、パネル展と関連した「アーカイブズが語る首都東京の形成史（講師・西木浩一）」を開催、平日の午後にも関わらず当初の募集人員を拡張して100名の申込みを得た。



天井の高いエントランスホール壁面を利用した巨大パネル

Ⅲ 巡回パネル展の成果と課題

東京都の「Old meets New 東京150年」事業に参加する形で取り組んだ4会場での巡回パ

ネル展は9月から12月に及ぶ長期間にわたって展開された。トータルしてご観覧いただいた方の人数は当然これまでの企画展史上最高に達している。会場の制約から都庁・都立多摩図書館・東京区政会館での観覧者数は不明であるが、当館で開催した展示については以下のようになっている。

開催日 平成30年10月23日～11月20日（開館日数は21日）

観覧者数 602人 1日当たりの観覧者数 約29人

この1日当たりの観覧者数は過去に当館を会場にして開催した企画展の中でも最高値となった。また、アンケート集計によれば、この企画展で当館を初めて知ったという方が37%いらっしまった。普及事業としての展示を繰り返し展開していく意義は依然として大きい。

展示内容については「大変よかった」41%、「よかった」51%、「普通」7%、「もう少し」1%と概ね好評価をいただいたが、展示スペースが小さい、原文書の展示が少ないといったご意見もあった。現行施設の限界ではあるが、工夫を凝らして充実感の得られる展示を心がけていきたい。